

「アントーニオ、ヴェニスの [悲しみを負った] 商人」

工 藤 敦 子

マイケル・ラドフォード監督の『ヴェニスの商人』は、息詰まる裁判の場面は無論、Shylock 役のアル・パチーノと Antonio 役のジェレミー・アイアンズの好演などから刺激を受け、William Shakespeare の原作を改めて考えるきっかけとなった。¹⁾ 映画の中で、ゴンドラに乗っている Bassanio から声をかけられた Antonio は彼の名前を呼び返し、親しみを込めた微笑みを浮かべる。しかし、その微笑みはすぐに消え、まなざしには「憂い」が現われる。映画において Antonio が Bassanio に見せる、この一瞬の表情は、劇の冒頭で Antonio が登場するや否や口にする、“In sooth I know not why I am so sad, / It wearies me,...;” (I.i.1-2) という言葉に結びついていくかのようだ。映画で Antonio が登場する度に、その目にはどこか「悲しい」表情が潜んでいるように見える。映画において気にかかる点は他にもある。それは Antonio を待ち受けている結末である。劇の終幕の Belmont が平穏に向かっていく中で、Antonio も一部の「船の無事を確認」するのであるが (V.i.287-288)、映画の Belmont では Antonio に朗報が届くこともなく、彼は証文を手にして一人窓辺にたたずむ。このような結末の違いも含め、映画の『ヴェニスの商人』には、原作をふり返らせる要素を見つけることができる。

映画作品を契機に劇を再考するにあたり、Ser Giovanni Fiorentino の *Il Pecorone* から “Day 4 Story 1” (本稿では「編者による英訳」を用い、以下 “Story” と略す) を取り上げたい。なぜなら、*The Merchant of Venice*

と「*Il Pecorone* という物語集中の一話は最も多大の類似点をもっている」ので、恐らくこれが Shakespeare の根拠となっている」と見られているから、そしてその結末が映画や劇のそれとは全く異なっているからである。²⁾

“Story” では Florence の “merchant” である Bindo の “youngest son”, Giannetto が生前の父の言葉に従い、後に “godfather” となる Venice の “merchant”, Ansaldo を訪ね教育を受け、「誰からも尊敬される」人物になる (pp.463-464)。Bindo と Ansaldo は「非常に裕福で」 (p.463), また「親友」 (p.464) でもある。Ansaldo と Giannetto の関係が、劇での Antonio と Bassanio の関係に相当する。人間関係の設定に相違はあるが、Ansaldo も Antonio も自分の命をかけてかけがえのない人のために尽くす点は同じである。³⁾ ところが両者の決定的な相違は、“Story” の最後で Ansaldo が「結婚する」ことである (p.476)。本稿では、Antonio が用いる “sad” という言葉の捉え方と、Ansaldo と Antonio の結末の相違という二つの焦点から、劇と Antonio という人物の関係を探り、何が見えてくるのか考察したい。この関係を鮮明にするために、*Il Pecorone* の “Story” との対比や先の映画作品への言及を交え論を展開していく。

初めに、Antonio が使う “sad” という言葉の捉え方を “Story” と対比してみよう。Ansaldo が落胆するのは、航海に出た Giannetto の安否がわからず「絶望している」ときであり、Ansaldo の様子は “very disconsolate” という言葉で訳されている (p.466)。⁴⁾ しかし Giannetto の「無事」を知ったときの反応については、“‘If he is alive, I am satisfied. I care nothing for the wealth that is lost. Where is he?’” (p.466) と記されており、Ansaldo の「絶望」の理由は明らかで、その「絶望」は Giannetto を前にして消えていく (p.466)。“Story” の中で “melancholy” という言葉は度々見られるが、この Geoffrey Bullough 訳において、その言葉と関わっているのは、むしろ Giannetto の方である。“a widow lady” (p.465) への思いを成就できない Giannetto が彼女のもとを去る様子は、

最初が “very sorrowful and melancholy” (p.466), 二度めは “sad and melancholy” (p.468) と表わされ, 彼の実状を知らない Ansaldo が彼を励ますときにも, 最初は “‘…not be melancholy.’” (p.467), 二度めは “‘do not make yourself melancholy for a moment.’” (p.468) というように, ほとんど同じ言葉が使われている。ところが Giannetto の「悲しみ」の理由も Ansaldo の場合と同じく明らかで, Giannetto が「思いを遂げ」, “the lady” と結婚すると (pp.470-471), それは消える。⁵⁾ “Story” に見られる「絶望」や「悲しみ」は, あくまで個人の感情の枠を超えず, 時間によって解決される。

それに対し, Antonio が用いる “sad” という言葉はどのように捉えられるのだろうか。彼の「沈んだ気分」の理由について, Salerio は “I know Antonio / Is sad to think upon his merchandise.” (I.i.39-40) と言い, Solanio は “Why then you are in love.” (I.i.46) と返すが, Antonio は彼らの答えを否定し (I.i.45, 46), Gratiano との対話の中で自ら, その理由を語る。

Gra. You look not well Signior Antonio,

You have too much respect upon the world:

They lose it that do buy it with much care, —

Believe me you are marvellously chang'd.

Ant. I hold the world but as the world Gratiano,

A stage, where every man must play a part,

And mine a sad one.

(I.i.73-79)

劇の冒頭での “In sooth I know not why I am so sad,” という一行について, テキストには脚注があり, そこでは他の作品の例を挙げながら “It

was usual to be unaware of the cause of one's melancholy..., or at least to be secretive about it...”と解説している。⁶⁾ つまり “the cause of one's melancholy” を「明確にしないこと」が、一つの表現形式になっていたのである。しかし、この場で Antonio は「沈んだ気分」の理由を単に「私が演じなければならない役」のためであると言う。「人間はみな役を演じなければならない」という Antonio の言葉から思い浮かぶ人物は *As You Like It* に登場する Jaques であるが、James Kirkup は “Antonio is the type of melancholy philosopher, an early sketch, perhaps, for Jaques in *As You Like It*,” と述べている。⁷⁾ Antonio の理由の説明は個人の思いを伝えているが、“type” や “an early sketch” という解釈からすれば、その理由は登場人物の設定にもつながっていると考えられる。Agostino Lombardo は、その Jaques の言葉を引用し論を進めていく。

‘All the world's a stage’ says the melancholy Jaques in *As You Like It*, and he goes on to draw a detailed comparison between the life on man, with his entries and exits, and the various acts of a play. The speech is rightly praised and frequently quoted although its concepts are not original. The metaphor — which was also inscribed at the entrance of Shakespeare's Globe Theatre (*Totus mundus agit histrionem*) — runs right through classical times, the Middle Ages and the Renaissance;⁸⁾

“the cause of one's melancholy” を「明確にしないこと」は一つの形式であったが、上記の引用が示すように、Shakespeare は「伝統的な」“metaphor” を用いて作品と登場人物の「役」を捉えたとも解釈できる。このように二つの「形式」を踏まえて、Antonio の「沈んだ気分」

に関する描写を見ることができる。また、Kirkup が挙げる “four main themes in the play” において、“the third theme” は “hell, weariness and tedium contrasted with heaven, love, bliss” であるが、Kirkup は “The play begins with Antonio’s references to his sadness and weariness, and these themes continue throughout the comedy. They seem to be the human expression of disgust and worry about money and business.” と指摘している。⁹⁾ つまり Antonio の「沈んだ気分」は劇の冒頭から Venice に潜み、ひいては劇全体に浸透していくのである。J. Middleton Murry は Shakespeare が “Antonio’s melancholy” を不可解にしたこと、更にそれと劇との関係を “Shakespeare was taking advantage of that part of Antonio’s character which was free to introduce a depth into his character, and still more a feeling-tone into the play, which he felt the play could bear, and which would enrich it.” と論じる。¹⁰⁾ *Il Pecorone* の “Story” の限られた状況での「絶望」や「悲しみ」は、*The Merchant of Venice* において “sad” というキーワードに変化する。なぜなら、この言葉は先の一連の引用が示す通り、Antonio の人物像の一面を表わすと共に、劇の “themes” となって、その基調を決める重要な意味をもっているからである。このように “sad” は個人の問題を超え、劇の基調に関わるレベルまで解釈の幅を広げる言葉なのである。

次に取り上げる焦点は、Ansaldo と Antonio の結末の相違であるが、先に Ansaldo の場合を具体的に見てみよう。“Story” の最後は “the ring” の話 (pp.475-476) に続き, “Giannetto then called the damsel who had warned him not to drink that evening, and gave her as wife to Ansaldo; and they spent the rest of their lives in great joy and happiness.” (p.476) と締めくくられる。こうして “Story” は試練をくぐり抜けてきた Giannetto と Ansaldo の「幸福」で終わる。¹¹⁾

Ansaldo のような「幸福」が訪れないにしても、Antonio の結末は、本

稿の冒頭で述べた映画作品の最後ほど悲劇的ではない。Antonio への朗報は Portia によって伝えられる。

Antonio you are welcome,
And I have better news in store for you
Than you expect: unseal this letter soon,
There you shall find three of your argosies
Are richly come to harbour suddenly.

(V.i.273-277)

Antonio 自身も “Sweet lady, you have given me life and living; / For here I read for certain that my ships / Are safely come to road.” (V.i.286-288) と Portia の知らせに答える。「私の役は落ち込む役だ」と話していた Antonio であるが、この朗報を得るか得ないかは大きな違いである。Ansaldo のような「幸福」とはいかないまでも、彼の「幸福」の路線を引き継ぎ、Antonio は自分にとっての不幸中の幸いをつかむのだ。Bullough は朗報には “chance” が関わっているとしても, “chance does not reign in *The Merchant of Venice*. Antonio is saved, despite bad fortune, by the gratitude and skill of his friends.” と述べており, Antonio にとっての「幸福」を考えると、彼を心配する人々の行動に注目することも必要であると思われる。¹²⁾

しかし、Antonio をめぐる結末はこれで一件落着とはいかない。Lombardo は、この喜劇においても “Metatheatre abounds throughout; the play teems with disguises, pretences, masks, *coups-de-théâtre*.” と捉え論じているが、劇の最後を次のように解釈する。¹³⁾

Love, almost lost and found again, now feels the tremor of

ambiguity; Belmont will never be the same again. The old harmony seems lost for ever; Antonio, whom Bassanio's marriage leaves in a loneliness similar to that of Shylock, is the expression of this loss. The use of the metatheatrical device in *The Merchant of Venice* leaves us with a final impression of human fragility, precariousness and ambiguity; it is not only for Antonio or for Shylock that the 'mercy' exalted by Portia should be invoked, but for all those who, like them, are cast in the 'clay' of the human condition.¹⁴⁾

Antonio は裁判という最大の困難を乗り越え、一部の「船の無事」を知らされても、彼の「沈んだ気分」は晴れないままである。先に引用したように Lombardo は“Metatheatre”の視点から劇を捉えているが、この彼の指摘は、若者たちが結婚するまでの試練や死に直面した裁判など、一つずつ解決に向かっていく喜劇においても、Antonio の問題が未解決であることの意味を掘り下げていく。そして Lombardo の引用は、“human fragility, precariousness and ambiguity”が、個人の「内面」の問題から「全ての人間」に共通する問題へ至ることを強く訴えている。Ansaldi とは異なり、幸と不幸を合わせもつ Antonio の「複雑」な結末も、“sad”という言葉のように劇全体の豊かな解釈に結びついていくと思われる。「沈んだ気分」の理由の「不明確さ」に加え、Antonio が「落ち込む役」に捕われ続けるという設定は、「人間」の心の不可思議さについて問いかけてくる。

それでは、Antonio が用いた“sad”という言葉の捉え方と Ansaldi とは異なる Antonio の結末の意味から、*The Merchant of Venice* と Antonio という人物の関係について、どのようなことが見えてくるのであろうか。二つの焦点をめぐる Kirkup, Lombardo, Murry の見解を踏まえると、Antonio は一人の登場人物の「役」を担うだけでなく、劇の雰囲気をかも

し出し、劇全体への理解を深める「役」をも担っていると言える。それは、すなわち登場人物表の一部を変えて示すならば、Antonioは“*a [sad] Merchant of Venice*”の「役」を演じているということであるが、1600年の“quarto”の“title-page”には、“The most excellent / Historie of the Merchant / of Venice. VVith the extreame crueltie of *Shylocke* the Iewe / towards the sayd Merchant, in cutting a iust pound / of his flesh:...”と記されている。¹⁵⁾ この“title-page”の“sayd”という言葉は、正にAntonioの「役」を「象徴」しており、“*a [sad] Merchant of Venice*”の「役」を負うAntonioは、劇において“sad”に込められた意味の「重要性」を投げかけてくるのだ。

本稿の冒頭で触れた映画作品でAntonioを演じたアイアンズは、インタビューの“「アントーニオについて」”という項目に対し、「劇中のアントーニオは成功した男だが 最後に こう自覚する“富は幸せをもたらさない”と」と述べている。¹⁶⁾ またアイアンズは同じ質問について、ヴェネチア映画祭でのインタビューでは、「アントーニオという男は一晩年を迎えて バッサーニオを息子同然に愛している だが最終的に彼はバッサーニオを失う 自分の大切なものを一つまり 愛するバッサーニオを人に託すんだそして最後に再び独りになる そういう男だ」と答えている。¹⁷⁾ アイアンズの見解には、Antonioの人物像への明快な分析が表われている。実際、映画の最後でBassanioたちが去った後、証文を手にしたAntonioには、「孤独」の内にも自分の境遇を悟っている様子が窺える。けれども、一部の「船の無事」という不幸中の幸いさえ手にすることができなかったAntonioの「孤独」は、一層増していくように感じられる。それはLombardoが指摘したAntonioの“loneliness”と重なる状況であり、映画ではAntonioに続き、“loneliness”に置かれたShylockも姿を見せる。しかし、そのようなAntonioの結末であっても、二つのインタビューにおけるアイアンズの言葉には、AntonioがGratianoに話していた「自分の役」を「自覚」し、

Bassanio への深い「愛情」を全うしたと言い切れる潔ささえ感じられるのではないか。¹⁸⁾ 映画作品のように Antonio への結末が厳しくなれば、それだけ彼は “a [sad] Merchant of Venice” の「役」を負うことになる。映画作品でも原作でも、Antonio が「自分の役」を「自覚」し、それに徹する強さをもっている点は共通していると言えるだろう。“a [sad] Merchant of Venice” という「役」は、“sad”という言葉に込められた様々な思いへ私たちを導いてくれる。

注

テキストは、*The Merchant of Venice*, (The Arden Shakespeare), ed. John Russell Brown, (1955; rpt. London: Methuen & Co. Ltd, 1985), *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, ed. Geoffrey Bullough, Volume I (1957; rpt. London: Routledge and Kegan Paul Ltd, New York: Columbia University Press, 1964), “I. Translation of Probable Source *Il Pecorone* by Ser Giovanni Fiorentino (1558) Day 4 Story 1 translated by the editor” を用いた。テキストからの引用に際し、*The Merchant of Venice* の場合は幕、場、行数を、*Il Pecorone* の場合はテキストのページ数を示す。

- 1) 本稿で取り上げる映画作品は、マイケル・ラドフォード監督、『ヴェニスの人』、アメリカ、イタリア、ルクセンブルク、イギリス合作、2004年、提供：東京テアトル株式会社、(株)アートポートであり、同作品のDVDビデオ、発売元：(株)アートポート、販売元：ポニーキャニオンを参考にしている。
- 2) 『ヴェニスの人』、(研究社詳注シェイクスピア双書 14)、市河三喜、嶺卓二注釈 (1964; 東京：研究社, 1984), Introduction, p.xi 参照。Bullough も *Il Pecorone* が *The Merchant of Venice* の “source” であるという強い結びつきを指摘する。Bullough, *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Introduction, p.446, p.449 参照。*The Merchant of Venice* の “source” や、それらの作品との比較などについて参照した主な文献をまとめて以下に挙げる。市河、嶺注釈、『ヴェニスの人』, pp.x-xii, Brown, *The Merchant of Venice*, Introduction, p.xxiii, p.xxvii-xxxii, pp.xxxvii-xxxix, pp.xlv-1, Bullough, pp.445-462, Hardin Craig, Waldo F. McNeir, *Five Plays of Shakespeare* (Chicago: Scott, Foresman and Company, 1965),

p.143, pp.145-146, pp.148-149, H. R. D. Anders, *Shakespeare's Books: A Dissertation on Shakespeare's Reading and the Immediate Sources of His Works* (Berlin, 1904; rpt. New York: AMS Press, Inc., 1965), p.65, p.120, pp.123-124, p.144, p.202, p.203, p.241, p.279, *Shakespeare: The Merchant of Venice*, (A Casebook), ed. John Wilders (London: Macmillan and Co Ltd, 1969), Introduction, pp.11-13, Roberta Mullini, "Streets, squares and courts: Venice as a stage in Shakespeare and Ben Jonson", *Shakespeare's Italy: Functions of Italian Locations in Renaissance Drama*, eds. Michele Marrapodi et al. 2nd ed. (1993; Manchester and New York: Manchester University Press, 1997), pp.164-165, Leo Salinger, "The idea of Venice in Shakespeare and Ben Jonson", *Shakespeare's Italy*, pp.174-177.

- 3) Brown は *The Merchant of Venice* の Introduction, p.xlv において, "In *Il Pecorone*, the merchant is Giannetto's godfather, but Shakespeare has added a new theme by making them friends. Friendship, or 'amity', was a high theme, and its virtues were often praised;" と説明する。
- 4) 市河, 嶺注釈の『ヴェニスの商人』, pp.xi-xii には「第4日目の第1話の概略」があるが, その中で Giannetto の安否を心配している Ansaldo の様子を「Ansaldo ははなはだしい憂うつに閉ざされていた。」と取り上げている。市河, 嶺, p.xi 参照。尚, The Arden Shakespeare の *The Merchant of Venice*, Appendix I の "Story" では, Ansaldo が Giannetto の安否を「非常に気にかけている」様子を "very melancholy" と訳し (p.143), 落ち込む Giannetto を Ansaldo が励ますときにも "melancholy" が用いられている (p.145)。
- 5) Mark Van Doren は Antonio の「落ち込み」と比較して, "Antonio is abstracted and sad for no reason that he knows. Shakespeare's source named a reason, but it has been suppressed in the interest of a mood the play must have." と述べている。Mark Van Doren, "*The Merchant of Venice: An Interpretation*" (1939), *Shakespeare: The Merchant of Venice*, p.92. 参照。
- 6) Brown, p.4 参照。この脚注では続いて "Antonio's melancholy" を "dramatic foreboding in Shakespeare" として捉えている例が挙げられており,

James Kirkup は Antonio の「役」についての、この台詞を受けて、“But it is most likely that Shakespeare shows us Antonio’s sadness as a dramatic device to prepare us for the spectacle of his later troubles.” と述べている。James Kirkup, *The Merchant of Venice*, (James Kirkup’s Tales from Shakespeare), Edited with Notes by Takeshi Kurahashi (1976; rpt. Tokyo: Asahi Press, 1983), p.14 参照。

- 7) Kirkup, pp.13-14.
- 8) Agostino Lombardo, “The Veneto, metatheatre, and Shakespeare”, translated by Bernadette Falzon, *Shakespeare’s Italy*, p.143. “All the world’s a stage” の概念に関しては *Shakespeare’s Books* にも項目があり、そこでも “Globe Theatre” への言及が見られる。Anders, p.279 参照。
- 9) Kirkup, p.11, p.12 参照。Antonio の「沈んだ気分」と劇の関係について参照した主な文献をまとめて以下に挙げる。J. Middleton Murry, “Shakespeare’s Method: *The Merchant of Venice*”, *Shakespeare The Comedies: A collection of Critical Essays*, ed. Kenneth Muir (New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1965), pp.33-34, pp.44-46, Lombardo, p.152, p.153, J. R. Mulryne, “History and myth in *The Merchant of Venice*”, *Shakespeare’s Italy*, p.88, p.91, pp.92-93, p.94, p.95.
- 10) Murry, p.45.
- 11) Bullough は *Il Pecorone* の “Story” を “This delightful narrative (here translated [Text I]) with its gay tone…” と表わしている。Bullough, p.449 参照。
- 12) Bullough, p.460 参照。Imtiaz Habib も “When Antonio is in trouble, his friend’s clever wife, Portia, becomes his defense lawyer and saves him. Antonio’s kindness is graced by good luck—his lost ships return and his wealth is restored. All those who love, get their beloved.” と述べる。Imtiaz Habib, *Shakespeare’s Pluralistic Concepts of Character: A Study in Dramatic Anamorphism* (Selinsgrove: Susquehanna University Press, London and Toronto: Associated University Presses, 1993), p.46 参照。また,

シーザー・L・バーバーは第五幕での Antonio と Lorenzo への「知らせ」について、「だが、このように特にめでたい事件も、ここでは感傷的には映らない。なぜならば、シェイクスピアはそれらを、社会や自然界がもつ、生を支持し、それを破壊するものを駆逐する傾向の表現の上に浮かべてしまっているからなのである。」と捉える。シーザー・L・バーバー、『シェイクスピアの祝祭喜劇』、玉泉八州男、野崎睦美訳、(1979; 東京: 白水社, 1983), p.314 参照。

- 13) Lombardo, p.152 参照。Lombardo は喜劇だけでなく、Shakespeare 作品全体にわたって論じている。Lombardo, pp.143-157 参照。
- 14) Lombardo, p.153.
- 15) Brown, p.xi 参照。この“title”に注目するにあたっては、Richard A. Levin, *Love and Society in Shakespearean Comedy: A Study of Dramatic Form and Content* (Newark: University of Delaware Press, London and Toronto: Associated University Presses, 1985), p.17における「“the two Quartos of 1600 and 1619”には“a running title that mentions the ‘extreame crueltie of Shylocke the Jewe towards the sayd Merchant’ and ‘the obtayning of Portia by the choyse of three chests.’”が時々つけ加えられる。」という言及が役立った。Levin は、この“title”から Antonio と Shylock それぞれの“role”の「意味」を読み取っている。Levin, p.17 参照。“quarto”の“tytle”は Craig, McNeir, p.145 でも取り上げられている。Graham Midgley は終幕での登場人物たちの退場の動きを解説するが、Antonio の場合を“and Antonio is left behind to walk from the stage alone, the stage to which he had likened his world, where he must play a part, and that a sad one.”と表わし、Shylock の「寂しい」退場の動きと重ね合わせる。Graham Midgley, “*The Merchant of Venice: A Reconsideration*” (1960), *Shakespeare: The Merchant of Venice*, p.207 参照。Antonio の退場の動きを描いた、この Midgley の表現は、Antonio が“a sad one”という「自分の役」を負っていることを思い出させる。
- 16) 注 1) で示した DVD ビデオの「特典映像」の「キャスト & スタッフインタビュー」からの引用。同 DVD についている冊子、*William Shakespeare's The Merchant of Venice* の Cast 紹介でのアイアンズの言葉と重なる箇所が

ある。

- 17) 注 16) で述べた「特典映像」の「日本版オリジナル・インタビュー in ヴェネチア映画祭」からの引用。この引用にも注 16) で挙げた Cast 紹介でのアイアンズの言葉と重なる箇所がある。
- 18) Antonio の「愛情」を捉えた指摘の中で印象的な表現を以下に挙げる。Bullough は「鉛の箱」に示された “Who chooseth me must give and hazard all he hath.” に触れ, “This is what Giannetto did each time he went to Belmont, and by choosing lead Bassanio is doing for love of Portia what Antonio in his different way has done for him.” と Antonio の行動にも言及する。Bullough, p.460 参照。Habib も Antonio の Bassanio への「思い」を “his friendship and generosity to Bassanio in particular are endless.” と表わしている。Habib, p.45 参照。Doren は法廷で Bassanio に「死」の覚悟を伝える Antonio のことを “He is in short one of Shakespeare’s gentlemen: one who wears darker clothes than his friends but knows perfectly how to wear them.” という印象的な表現で描写した後, “Love is the natural language of these men and women: love, and its elder brother generosity.... But generosity to all friends, and an unmeasured love.” と述べ, Bassanio に対する Antonio の “love” も取り上げる。Doren, pp.93-94 参照。

注で用いた文献以外の主な参考文献として, Laurie E. Maguire, *Studying Shakespeare: A Guide to the Plays* (Oxford: Blackwell Publishing Ltd., 2004), pp.51-56, pp.147-149, W. H. Auden, “Brothers and Others” (1963), *Shakespeare: The Merchant of Venice*, pp.224-240 を挙げる。